



TITLE:

頼母子ノ起源ト其語原

AUTHOR(S):

三浦, 周行

CITATION:

三浦, 周行. 頼母子ノ起源ト其語原. 經濟論叢 1918, 7(5): 577-587

ISSUE DATE:

1918-11-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127460>

RIGHT:

經濟論叢

第七卷 第五號 (通卷第四十一號) 大正七年十一月發行

論

說

賴母子ノ起源ト其語原

三 浦 周 行

一

一種ノ救濟制度ニシテ、又相互融通制度タル賴母子ノ史的方面ハ、從來二三學者ノ研鑽ヲ經タリシモ、最近世ニ公ニセラレタル池田龍藏氏ノ『(稿本)無盡の實際と學說』ノ研究ホド委曲ヲ盡クシタルモノナシ。然ルニ余輩ハ稍々著者ト所見ヲ異ニスル點アルヲ以テ曩ニ『史林』第二卷第三號ニ於テ聊カコレガ批評ヲ試ミタリシガ、其ノ中ニハ多少意ヲ盡サザル點アリ、又後ニ至リテ補正ノ必要ヲ感ジタル事モアレバ、改メテココニ卑見ヲ述ベントス。

二

賴母子ノ歴史ニ就キテ第一ニ知ラザルベカラザルハ記錄ニ見エタル最初ノ賴母子ノ事ナリ。コ

論 說 賴母子ノ起源ト其語原

第七卷 (第五號) 五七七

レニ就キテハ余輩ハ去ル明治三十三年九月發行『法學協會雜誌』第十八卷第九號ニ載セタル「法制雜攷」(寺院法ノ研究)ニ『高野山文書』又續寶簡集八六ヨリ建治元年十二月猿川、眞國、神野三庄々官ノ請文ヲ引用シテ、其ノ中ニ見エタル憑支ノ名稱ニ説明ヲ加ヘ置キシガ、今日猶記録ノ上ニテハ、ソレ以上古キモノヲ發見セズ。池田氏ハ廣ク賴母子ニ關スル古文書記録等ヲ涉獵セラレシモ、其ノ初見トシテハ、亦此ノ建治元年ノ文書ヲ引用セラレシニ過ギズ。

此ノ文書ニハ「號憑支」ニ取百姓錢事トアリテ、此ノ種ノ行爲ヲ禁ゼシモノナリ。池田氏ハ此ノ文書ノミニテハ未ダ其ノ内容ヲ知ル事能ハザレドモ、後世ノたのもしガ亦憑支ト書カルルヲ見レバ、同一ノモノナル事明ナリトイヘリ。サレド少シク後年ノモノナガラ、高野山文書ニ收メラレタル他ノ多クノ同種ノ請文ニ據レバ、

一、觸レ事隨レ折、不_レ可_レ致_二百姓煩_一、或號_二借用_一不_レ返、或稱_二客人料_一不_レ可_レ貴_二取祇候料_一、或構_二憑支_一、乍_レ取_二百姓錢_一、自身不_レ懸_レ之事、

ト記サレ、ソレニハ庄官ガ自身所謂賴母子ノ親ニナリテ部下ノ百姓ニノミ錢ヲ懸ケシメナガラ、自ラ懸錢ヲ怠ル事ヲ指摘セリ。余輩ノ舊稿ニ「其コレヲ禁ゼルハ往々自懸ケズシテ、住民ノ錢ヲノミ取ルノ弊アリタレバナリ、」トノ解釋ヲ下セルモコレガ爲メナリキ。又同ジク『高野山文書』(續寶簡集六八)嘉元四年(德治元年)十一月二十六日ノ入寺泰助ノ紛失狀ニハ、

右件水田者、泰助相傳領掌私領也、而聖達房憑支之質ニ入置之處、嘉元四年二月二十五日功德聚院燒失時燒之畢、

ト見エテ、賴母子ノ擔保ニ水田ヲ入レタリシモノアリ。是等ノ資料ヲ以テ見ルモ、略鎌倉時代ニ於ケル賴母子ノ内容ヲ知ル事ヲ得ベク、大體ニ於テ、後世ノモノト異ラズト見ルノ外ナシ。唯利子ヲ附スル事ハ至德四年二月二十五日ノ無盡契約狀ニ見エタレドモ、本來ハコレヲ附セザリシナルベシ。コレニ就キテハ猶後ニ述ブル所アルベシ。

三

以上ハ唯初期ノ賴母子ノ記錄ニ見エタルモノニ就キテ述ベタルノミニテ、賴母子其ノ物ノ發生ハ無論ソレヨリ以前ニアリトセザルベカラズ。然ラバ賴母子ハ果シテ何時ニ始マリシカ、余輩ハ二ツノ方面ヨリコレヲ觀察スベキモノナラント信ズ。即チ其ノ一ハ賴母子ト同一若シクハ類似ノ事實ガ何時頃ヨリアリシカトイフ事ヨリシ、他ハ賴母子ナル名稱ノ意義ヨリスベキコトコレナリ

(第二) 賴母子ト全ク同一ナルモノハ賴母子以前ニ見當ラザルガ如シト雖ドモ、賴母子ニ類似シタルモノニハ無盡錢土倉ナルモノアリキ。無盡錢ノ名ハ僧祇律ノ無盡財ヨリ出デタルモノナルベク、土倉即チ質屋ガ擔保利息附ニテ錢ヲ貸スライフ。其ノ始メテ記錄ニ見エタルハ、管見ノ及ブ所ニテハ『新編追加』ナル建長七年八月十二日ノ鎌倉幕府ノ御教書ニシテ、ソレニハ

鎌倉中舉錢近年號無盡錢不_レ入_二置質物_一之外、依_レ不_レ許_二借用_一、中乙人等、以_二衣裳物具_一置_二其質_一ニ云々、

トアリテ、其近年ヨリ始マリシ事ナルヲ知ルベシ。又同書ノ弘安二年十一月三十日ノ鎌倉幕府ノ下知狀ニハ、石原左衛門五郎高家ガ鎌倉ノ住人慈心ニ無盡錢ノ質物トシテ入_レ置キタル腹卷ノ事

ニ就キテノ判決ヲ載セタリ。思フニ此ノ慈心ハ鎌倉ノ土倉ニシテ、御家人ノ一人ナル石原ヨリ無盡錢ノ擔保ニ其ノ腹卷ヲ取リシモノナルベシ。『建武式目』ノ第六條ニ「可_レ被_レ與_ニ行無盡錢土倉_ニ事」ト見エタルモノ亦此ノ土倉ナリ。而シテ其擔保利息附ニテ錢ヲ貸ス點ハ後ノ賴母子ト同一ナルヨリ、『香取文書』ニ收メタル至徳四年二月二十五日ノ無盡契約狀以下賴母子ト同一ノ事ヲ無盡ト書ケルモノアルナリ。

賴母子ト無盡トノ關係ニ就キテ法學博士中田薫氏ハ其ノ「賴母子ノ起源」(國家學會雜誌第十七卷第二百一號)ニ於テ二者同一物ナリトイハレ、文學士柴謙太郎氏ハ「經濟大辭書」賴母子ノ項ニ於テ賴母子ハ無盡錢ニ其ノ源ヲ發セシニハアラザルカトイハレ、池田氏ハ又無盡ハ賴母子ニ無盡錢土倉ヲ加味シタリシモノナルベシト論セラレタリ。此ノ點ニ就キテハ、余輩ハ下ニ述ブルガ如キ理由ノ下ニ、賴母子ハ本來無盡ト同一物ニアラザレドモ、其ノ中ニ無盡錢土倉ノ影響ヲ受ケタリシ賴母子ガ發生シテ、無盡トモ、賴母子トモイハレシモノニテ、其無盡ト同一物ナリトイヒ、無盡錢ニ起源シ、又コレヲ加味セリトイヒ得ルモノハ、此ノ種ノ賴母子ニ限ラルベキモノナリトイハントス。

鎌倉時代ノ賴母子ニテハ發起者タル親モ組合員タル衆中モ同様ニ懸錢ヲナシ、擔保ヲ提供スル事見エタレドモ、『高野山文書』ニ據レバ、擔保附ナリシトハ思ハレズ。況ヤ利息附ナリシトノ記錄ハ鎌倉時代ニ見當ラザルノミナラズ、本來利息附ナラザリシト信ズベキ理由アリ。ソハ他ナシ、彼ノ質入貸借ヲ無效トセル永仁五年ノ徳政令ニ賴母子ノ事ノ見エザルヲ以テナリ。賴母子モ一種

ノ擔保附貸借ナラバ、徳政令ノ適用ヲ免ルベキ筈ナキモ、同令ニ於テハ利錢出舉即チ利息附ノ貸借ニ關スル訴訟ヲコン受理セザル事ニナリ居レ、利息ヲ加ヘザルモノニハ及ビ居ラズ。(庫倉即チ土倉モ適用ノ範圍外ニ置カレタリキ) 加之同時ノ發令ト信ズベキモノニ、

一 借物并預物事、難_レ准_二貨物_一、仍可_レ有_二其沙汰_一
トノ規定アリ。又ソレト同一ナリト思ハルモノニ、

一 借物事、可_レ有_二其沙汰_一、但可_レ加_二利分_一之由書_二載證文_一者、不_レ及_二沙汰_一、

トノ規定モアリ。其ノ意ハ借物ハ貨物ニ准ジ難キヲ以テ、コレニ關スル訴訟ハ受理スルモ、證文ニ利息ヲ附スル事ヲ記入セルモノハ此ノ限ニアラズ、イフニアリ。故ニ是ノ時行ハレシ賴母子ガ利息附ナリシナランニハ、當然同令ヲ適用セラレタルベケレドモ、其ノ事ナカリシ爲メニ、同令ニ除外セラレ、記錄ニモ現レザリシナラン。然ルニ其ノ後無盡錢土倉ノ影響ヲ受ケテ、本來ノ救濟ノ意味ノモノ以外ニ、専ラ金融組合トシテ行ハレタル賴母子ニ、擔保ハモトヨリ、利息ヲモ附スル事ニナリテヨリ、無盡ガ賴母子ノ一異名トナリシナルベシ。而シテ此ノ種ノ賴母子ノ生ジタルハ、一ハ徳政令ノ影響ヲ受ケテ、經濟界一般ニ信用缺如ヲ來タシ、無擔保無利息ノ信用組合ヲシテ成立ノ困難ヲ感ゼシメタルニ依ラズンバアルベカラズ。其ノ後室町時代トナリテハ此ノ種ノ賴母子ガ専ラ世ニ行ハレシヨリ、正長元年ノ徳政令ニ至リテ、ココニ始メテ賴母子ニモ適用セララル事トナレルナリ。是ノ時ノ徳成ニ憑支ハ「自國他國破畢」ト「興福寺大般若經後語」ニ見エタルハ鎌倉時代ノ徳政令ニ除外セラレシモノ丈ニ、殊ニ注意ヲ惹キタルナルベシ、尤モ賴母子ハ後世

ニテモ利息附ト利息附ナラザルトアリテ、室町時代ノ德政ニハ賴母子ノ懸錢ニ利息ヲ附シタルモノニ限リテコレヲ適用シタルコトアレドモ、正長ノ德政ハ其ノ間ニ除外例ヲ認メタルガ如キ形跡ナシ。當時ノ情勢ヨリ推セバ恐ラクハ一樣ニ無效トシタリシモノナラン。

四

(第二) 次ニ賴母子ノ名稱ハ如何ナル意義ヲ有セリヤ。コレヲ考フル以前ニ先ヅ、賴母子ノ特質ヲ辯ズルノ要アリ。『高野山文書』ノ庄官ノ請文ニ見エタル憑支ハ庄官ト百姓トノ組合ニナリシモノナガラ、前ニ引ケル「或號借用、不返、或稱客人料不可責、取祇候料、或據憑支、乍取百姓錢、自身不懸之事」トノ文ヲ見ルモ、江戸時代ニ於ケル幕府諸藩ノ御用金借入金ノ如ク自己ノ力ノ足ラザル爲メ、百姓ノ同情ニ訴ヘ其ノ助力ヲ求ムル手段トシテ、賴母子ヲ組織シタリシモノト思ハル。此ノ場合、庄官ニ於テモ、百姓同様、自己ノ懸金ヲナサバ可ナリシモ百姓ニノミ醸出セシメテ、自己ハ其ノ義務ヲ怠リシヨリコレヲ禁ゼラレシモノナリ。其ノ他『香取文書』ノ至德四年二月二十五日ノ無盡契約狀ハ相撲、神樂、大饗ノ頭役ニ當リシ神官ノ無力ニシテ勤仕シ難キヲ、面々同心シテ合力スル爲メニ、無盡(賴母子ニ同ジキ)ヲ組織セシコトヲ記セルモノナリ。然ラバ初期ノ賴母子ハ他人ノ好意ニ依頼シ其ノ助力ヲ求ムルヲ主眼トセシモノト見ザルベカラズ。

賴母子ナル語ノ意義ニ就キテハ、從來田實^{タノチ}の^ノ狩^ノ等種々ノ説アレドモ、何レモ牽強附會ニシテ探ルニ足ラズ。『言海』ニハ「相救ヒテ頼モシキ意」ト説キテ、頼モシトイフ形容詞ノ名詞トナ

リシモノト解セラレ、『頼母子ノ起源』ニハ頼母子ノ別名ヲ合力ト呼ビタルニテモ知ラルル如ク、多數人が合力依頼シテ互ニ融通ヲ計ルノ意トナセリ。コレニ對シテ柴氏ハ頼母子ハ「たのむのあし」ノ轉訛ニシテ、あしハ即チ料足ノ意ナリト説キ、池田氏ハ之ニ賛成シテ、相互ニ「頼み合ふ足」ヨリ轉訛セルモノナルベシトイヘリ。コレ等ノ諸説ハ何レモ頼むトイフ語ニ基クトナセル點ニ於テ相一致スレドモ、其ノ共通ノ缺陷トモイフベキハ、多數人ノ相互ニ頼ミ合フ相對的共濟的ノ意味ニ解セシ事ナルベシ。由來たのむノ語ハ自身力ナキモノガ他人ニ依頼シ、或ハ助力ヲ求ムルノ意ニシテ、初期ノ頼母子モ亦同一ノ目的ヨリ發生シタルモノナルベク、前ニ引用シタル『高野山文書』建治元年十二月ノ請文ニ「號憑支_二乞_一取百姓錢事」トアル外、同文書（又續寶簡集）正應四年十月十一日ノ請文ニモ「號憑支_二若稱助成_一不_レ可_レ乞_二百姓物事_一」ト見エタリ。憑支ヲ日本俗出_二少錢_一取_二多錢_一謂_二之憑子_一也」ト解セル『下學集』ニハ又頼母子ノ一名ナル助成、合力ニ就キテ「助成手傳_{（シシヤカフツケ）}合力_{（カ）}」ト記セリ。此ノ助成、合力ノ語ガ助力ノ義ナル事ハ言フ迄モナシ。サレバ前記ノ庄官ノ文書ニモ、百姓ノ物ヲ乞フトイヒ、或ハ百姓ノ錢ヲ乞取ト書カレテ、百姓ニ強制スル意味ヲ見ズ。故ニ頼母子ノ語ノ本來ノ意味ガ頼むノ意ヨリ出デタルモノナルハ余輩モ同意スル所ナレドモ余輩ハコレヲ以テ頼み合ふトイフ義トセズシテ、助力を求むトイフ意ニ解セントス。換言スレバ共濟的ノモノトセズシテ、救濟的ノモノトセント欲スルナリ。

然ラバたのむしハ何ヲ意味スルカ。頼母子ハ憑支、憑子、頼支、頼子、頼母子、頼母子ト種々ニ書カレタレド、何レモたのむしノ宛字ナリ。柴氏ハ語尾ノしヲ料足ノあしノ略ト解セラレ

タレド、たのむのあしがたのもし、ニナレリトスルハ餘リニ廻リ遠キ感アリテ首肯シ難シ。余輩ハたのむノ語ガたのもトナリ、ソレニシノ語尾ヲ加ヘテ一ノ名詞トナセルモノト解セントス。名詞ノ語尾ニ天爾遠波ノしを添ヘテ一ノ名詞ヲ形作ルハ他ニモ其ノ例アリ。えに(縁)といふ名詞ノ語尾ニシヲ加ヘテえにしトナシタルガ如キハ其ノ一例ナリ、あかし(燈)ノ如キモあか(赤)ノ名詞ノ下ニシヲ加ヘタルモノナルベシ。くすし(藥師)ノ類モ亦此ノ一例ト見ルヲ得ベキカ。

此ノたのむ又ハたのもニ就キテ思ヒ合ハサルルハ我國ニ於テ、古來八朔ノ節句ヲ憑ノ節句トイヒナラハセル事ナリ。コハ通例たのむトイハルレドモ『言經卿記』慶長八年八月五日ノ條ニ「禁中ヨリ御タノモ御返シノ御太刀被レ下候間云々」ト見ユル如クたのもトモイヒシナリ。是ノ日ハ公家武家共ニ物品ヲ贈答スル習慣アリテ、コレヲ贈ル方ヨリハ贈ラルル人ヲ指シテ憑ム人トイヒ贈物ヲ憑物トイヒ、贈ラレタル人ヨリハ返シトイヒテ相當ノ品物ヲ贈リタル人ニ報ユル事『師守記』曆應二年八月一日ノ條ニ「予憑人々覺照房第一本返帶一花平宮納白物云々」ト見エタルガ如シ。コレモ後ニハ形式的トナリテ相對的若シクハソレ以下ノモノニモ贈ル風習トナリ來レルモ、本來ハ先方ノ好意ニ依頼センガ爲メニ、其ノ返シハ必須ノ條件ニアラズ、或ハ返シヲナサザリシモアリ、又コレヲ受ケザリシモノサヘアリ。『園太曆』貞和五年八月一日ノ條ニモ「本朝風俗自他表微志事有之、予不_レ好_二此事_一、仍未_レ進_レ如_二仙洞_一也」トイヘリ。コレハ唯兩人間ノ贈答ニテ、賴母子トハオノヅカラ其ノ性質ヲ異ニシタリトハイヘ、他人ノ好意ニ依頼スルノ意ハ即チ一ニシテ、又其ノ憑物ニ對シテ返シヲナスハ賴母子ノ組合員タル衆中ガ互ニ懸金ヲ出シ合フ事ニ類似

シ、殊ニたのむトイヒたのもトイフ名稱ガたのもしニ近キハ其ノ間何等カノ聯絡アルベシト思考セラル。

余輩ハ前日ノ批評ニ憑ノ風俗ノ事ヲ記シテ康永二年ヨリ始ルトナセリ。ソハ『園太曆』貞和元年八月一日ノ條ニ關白トノ贈答ノ事ヲ記シテ『蓋俗習也、自去々年（康永二年）有此事也』トイヘル文ニ基キシモノナルガ、其ノ後櫻井秀氏ノ注意ニ依リテ『花園院御記』ヲ見ルニ、正和二年八月一日ノ條ニ、

今日自所々種々物等進之、是近代流例也、

トアリ、元亨二年八月一日ノ條ニ、

諸人進物如例、蓋是近古以來風俗也、於人無益、於國非要、尤可止事歟、然而強又非費、自然行來歟、猶不可然事也、雖非本意、被引時俗不能免、此事於君子有慙、可悲々々、但獨醒似狂、末代之法可悲、行基菩薩詞背世如狂人、隨世似有望、尤銘肝者也、

トアリ。又『康富記』文安五年八月一日ノ條ニハ

八朔禮事何比より在之事故之由尋申處、後鳥羽院末ッ方より出來歟、但不得槌所見、所詮先□□沙汰初歟、鎌倉より事起之由所語傳也、清家之□嘉元比之記ニ此事見候、近來如此之由注付云々、

トアリ。更ニ『桃華藥葉』ヲ見ルニ、

今日家々のいとなみにて、たのむ人に物たてまつる、此事はじまりてみそぢにもおほうあま
りけんとおほゆ、

トアル正應二年ノ御記(伏見天皇)ヲ引キテ、

就ニ此記「勘レ之、後深草院御代建長の比はひより事おこれるにや、宗尊親王の時代なるべし、
トイヘリ。『公事根源』ニモ或ル假名記(正應二年ノ御記ノ事ナルベシ)ニ建長ノ比ヨリ此事アリト
見エ、圓明寺太閤(一條實經)ノ文永ノ記ニ、此七八年ヨリ此カタ天下ニ流布セルヨシ載セラレタ
レバ、誠ニ建長ノ頃ヨリノ事ナルベシトイヒ、又後嵯峨天皇ノ東宮ノ頃ノ吉例ニ依レリトイフ或
ル説ヲ引キテ、後嵯峨院ノ御治世ノ時ヨリノ事ナラントナセリ。是等ノ諸説中根本史料ニ根據ヲ
有シテ最信憑スベシト思ハル、モノハ建長年代ニ始マレリトナス説ナリ。余輩ハソガ偶然ニモ前
項ニ説キタル無盡錢土倉ノ始テ見ユル年代ト一致セルヲ思ヒ合セ、更ニ賴母子ノ實質ヲ按ジテ、
其ノ發生ガ以上ノ二箇ノモノヨリ影響ヲ受ケタルモノナルヲ信セントス。即チ賴母子ハ他人ノ好
意同情ニ依賴シ、其ノ助力ヲ求ムル意味ニ於テ憑ノ風俗ニ受クルトコロアリ、又其ノ懸錢ガ擔保
利息附ナル點ニ於テ、無盡錢土倉ニ受クルトコロアリ。賴母子ノ名稱ガたのむ若シクハたのもニ
近ク、其ノ別名ヲ合力若シクハ助成トイヒタリシモノ之ガ爲メナリ。而シテ無盡ノ名稱ガ無盡錢
ヨリ來レルハ言フ迄モナシ。從ツテ賴母子ノ發生ハ建長年代ヨリ後ノ事ニシテ、又其ノ利息附ノ
行ハレ、無盡ノ名ヲ生ゼシハ永仁五年徳政令後ノ事ト推定セラル、モ其ノ何時ニアリヤハ的知シ
難シ。

五

柴氏ハ土倉ガ貸出ヲ背ンゼザル時他人ノ好意ニ依頼シテ少額ノ金ヲ取集メテ貸與スルコト換言スレバ、多數共同シテ一種ノ土倉ヲ作ルコトガ、頼母子ノ起源ナラントナジ、池田氏モ時勢ノ要求ニ連レテ鎌倉時代ニ土倉ガ生ジタルニ關セズ、村落ニハナク、都市ニモ亦充分ニ其ノ發達ヲ見ザリシ爲メニ、頼母子ヲ生ムニ至レリト論セラレタリ。頼母子ガ無盡錢土倉ノ影響ヲ受ケタルモノナルハ余輩モコレヲ認ムルモノナレドモ、必ズシモ、土倉ノ缺陷ニ乗ジテコレニ代ハルモノトシテ起リシトハ信ゼズ。頼母子ハ本來土倉ノ如ク營業的ニアラズシテ、救済的ナリ、個人事業ニアラズシテ組合事業ナリ。質屋ノ發達シタル現代ニ於テ頼母子、無盡ガ盛ンニ行レツ、アルヲ見ルモ、此ノ兩者ハ各特殊ノ性質ヲ有シテ發生シ、又發達シ來レリトナスベキナリ。又法學士尾佐竹猛氏ハ其ノ「無盡と頼母子」(郷土研究第三卷)ニ於テ、無盡ニ質屋系統ノモノト質屋系統ノモノト二種アルヲ説キ、後者ハ寺院用ヲ主トスルモノニシテ、寺院ガ財力ノ必要ヨリ憑頼系統ノ無盡ニ據リ出資ヲ得ントスルモ、寺院ノ無盡ハ既ニ惡名ヲ流シテ嚴禁セラレタル頃ナレバ、其ノ名ヲ避ケ、且ツ民間ノ營利的無盡ト趣ヲ異ニシ神聖ナル宗教的意味ヲ有スル公共的ノモノタルヲ示サンガ爲メ、たのもしトイヒ合力トイヘルナラント説カレタルモ余輩ハ頼母子其ノ物ハモト民間ニ於ケル一般の慣習ニシテ、無盡錢土倉ノ變態ニアラズトスルモノナリ。